

## 智歯の状態と症状に関する縦断的研究

著者	栗原 直之
号	33
学位授与番号	201
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/36658">http://hdl.handle.net/10097/36658</a>

氏 名 (本籍) : 栗 原 直 之 (群馬県)

学 位 の 種 類 : 博 士 (歯 学) 学 位 記 番 号 : 歯 第 2 0 1 号

学位授与年月日 : 平成 20 年 2 月 20 日 学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 2 項該当

最 終 学 歴 : 平成 8 年 3 月 26 日 東 北 大 学 歯 学 部 卒 業

学 位 論 文 題 目 : 智歯の状態と症状に関する縦断的研究

論文審査委員 : (主査) 教授 笹 野 高 嗣

教授 渡 邊 誠 教授 川 村 仁

## 論 文 内 容 要 旨

日常の歯科臨床において、症状のない智歯を抜歯するか保存するかの判断は、歯科医師個人の経験や考え方によるところが大きく、未だ客観的で明確な診断基準は得られていない。その背景には、智歯に関する信頼性のある疫学的データが非常に少ないことが挙げられる。本研究では、智歯の治療方針立案のための明確な指針を得ることを目的とし、智歯の状態と症状に関する一連の大規模な縦断的疫学調査研究を行った。

### 【研究 1】智歯の保有数、萌出方向および萌出程度の年次推移

1981年から2001年までの本学歯学部 6 年次学生1,312人を対象に臨床実習で撮影したパノラマエックス線写真を用い、智歯の保有数、萌出方向および萌出程度の21年間の年次推移を検討した。その結果、保有数および萌出程度については、上下顎とも年次推移がみられなかったが、萌出方向は、下顎では垂直が減少し、萌出方向異常を呈する智歯が増加していた。一方、上顎では萌出方向異常を呈する智歯の年次推移はみられなかった。

### 【研究 2】智歯の萌出方向および萌出程度と症状発現の連関

1973年から1989年までの本学歯学部卒業生790人のうち、6 年次の臨床実習で撮影した口内法エックス線写真において、智歯を有していた638人に対して、アンケートを送付した。回収できた308人の智歯（上顎394本、下顎416本）について、智歯の状態と症状発現との連関について検討した。その結果、症状の初発時期は20歳台、30歳台が多く、上下顎とも40歳までに90%以上の智歯に症状が初発していた。また、発現率は40歳以上が20歳台と30歳台に比べて有意に低く、40歳までに症状が発現しなければ、その後に症状が発現するリスクは低いことが明らかとなった。さらに、智歯の萌出方向および萌出程度と症状発現との間には連関性がないことが示された。

### 【研究 3】同一個人の智歯の萌出方向および萌出程度の経時的変化

1993年から2001年に入学した本学歯学部学生421人の 1 年次と 6 年次のパノラマエックス線写真を用い、同

一個人の智歯の経時的変化について検討した。その結果、萌出方向の経時的変化が約10～15%の智歯にみられ、萌出異常を呈した上顎智歯の約30%、下顎智歯の約10%が5年後に垂直へと変化していた。

以上の結果、智歯の治療方針立案に役立つエビデンスとして、①下顎智歯の萌出異常は年々増加傾向にある。②萌出程度および萌出方向と症状発現との間には連関性がない。③40歳までに症状発現がなければ、その後に症状が発現するリスクは低い。④萌出異常を呈した智歯の10～30%が5年後に垂直へと変化する、が明らかとなった。

## 審 査 結 果 要 旨

症状のない智歯を抜歯するか保存するかについては、未だ客観的で明確な診断基準は得られていない。その背景には、智歯に関する信頼性のある疫学データが非常に少ないことがある。本研究では、智歯の治療方針立案のための明確な指針を得ることを目的とし、信頼性のある疫学データをもとに、智歯の状態と症状に関する一連の大規模な縦断的疫学調査研究を行っている。

本研究ではまず、智歯の保有数、萌出方向および萌出程度の年次推移について検索するために、1981年から2001年までの本学歯学部6年次学生1,312人を対象に臨床実習で撮影したパノラマエックス線写真を用い、智歯の保有数、萌出方向および萌出程度の21年間の年次推移を調査している。その結果、保有数および萌出程度については、上下顎とも年次推移がみられないが、萌出方向は、下顎では垂直が減少し、萌出方向異常を呈する智歯が増加していることを明確にしている。一方、上顎では萌出方向異常を呈する智歯の年次推移はみられないことも明らかとしている。

次いで、智歯の萌出方向および萌出程度と症状発現の連関について検索するために、本学歯学部卒業生で6年次の臨床実習で撮影した口内法エックス線写真において智歯を有していた638人に対してアンケートを送付し、回収できた308人の智歯（上顎394本、下顎416本）について、智歯の状態と症状発現との連関について調査している。その結果、症状の初発時期は20歳台、30歳台が多く、上下顎とも40歳までに90%以上の智歯に症状が初発することを明確にしている。また、発現率は40歳以上が20歳台と30歳台に比べて有意に低く、40歳までに症状が発現しなければ、その後に症状が発現するリスクは低いことを明らかとしている。また、智歯の萌出方向および萌出程度と症状発現との間には連関性がないことを示している。

さらに、同一個人の智歯の萌出方向および萌出程度の経時的変化について検索するために、本学歯学部学生421人について1年次および6年次のパノラマエックス線写真を資料とし、同一個人の智歯の経時的変化について検討している。その結果、約10～15%の智歯に萌出方向の経時的変化がみられ、萌出異常を呈した上顎智歯の約30%、下顎智歯の約10%が5年後に垂直へと変化することを明らかとしている。

以上の結果は、症状のない智歯に対する治療方針決定に有益かつ貴重な情報であり、これまでにない確実なエビデンスである。したがって臨床歯学に寄与すること多大であり、博士（歯学）の学位授与に十分値するものと思われる。